

ガムシロップの容器から飛行機まで手掛けてきた山村真一氏。暮らしのためのデザインを貫く姿勢から見えてきた、社会全体を俯瞰するホロニック・デザイン理論。社会とデザインの関係性を探求し続ける山村氏が描くデザインの未来について訊いた。



山村 真一

Shinichi YAMAMURA

株式会社COBO代表取締役

www.cobodesign.co.jp/

ホロニックな着眼を

COBOの設立

1960年代、三菱重工業株式会社のインハウスデザイナーとして、これまで飛行機や船、鉄道、住宅に至るまで様々なデザインに携わらせていただきました。その中でも、高度成長と重なる頃、自動車産業を盛り立てていくため、自動車部門に配属されました。大衆車のチーフデザイナーとしてギャラン、ランサーなどの乗用車に加え、軽自動車、トラック、バスまで多様な車種をデザイナーさせていただきました。

独立したのは、1973年です。当時、戦後復興の基礎となったものづくりは、いかに効率を上げ、大量生産の軌道に乗せていくかが優先されてしまっていました。すると、すべての業務が専門分業化されていかに

地場産業との協業

異素材が生み出す新たな価値

株式会社COBOが軸となり、これからの50年の社会変化を学ぶため、北海道札幌で2007年頃から「山村塾」という講座を始めました。社会全体を俯瞰して見ていき、部分に落とし込んで再び全体を俯瞰するという思考法を学ぶ場所です。職種は、デザイナーだけに限らず、漁業や経営者、自治体で働いている人など多岐にわたります。そんな人たちが集まり、ホロニックな視点に立つデザインマネジメントについて学んでいます。

2017年、また社会が大きく変わろうとしています。自動車であれば自動運転や電気自動車がより普及していくことが予想されます。

るを得ません。そうした狭小な世界

でデザインを行っていると、本当に社会が求める良いものが何であるのか見えなくなってしまうのでした。例えば、自動車も交通システムの一部分です。そこでいくらか次世代型の自動車と違って技術開発を進めていっても、社会のトータルな考えに基づいた技術として多くの人々に使ってもらわなければ、結局、良い自動車とはいええず、すぐにスクラップされてしまうのが目に見えてしまいます。そこで社会全体でものづくりを捉えるホロニック・デザインという言葉を提唱する研究機関として、株式会社COBOを立ち上げることにしました。

ホロニックとは医療用語で、全体を意味しています。一部分ではなくトータルで社会を俯瞰する考えの重

それに伴い、AIやIoTなどあらゆる生活環境が変わっていくことでしょう。それと同時に並行して価値観も大きく変わっていきます。今、運転免許証を取る人が減ってきていると言います。こうした社会的な新しい価値観に、ものづくりの現場でも、合わせていかなければなりません。ここが大事なところです。

今こそ、デザイナーが本来の役割を果たしていける時代だと思っています。ブランディングや商品開発において、どれほどトータルな視点に立って動いていけるかが重要です。部分を磨き込むよりも社会全体の位置づけとして、一つひとつのプロジェクトを見ていくことが大切になってきます。

ホロニック・デザインの視点で見ると

要件が、このホロニック・デザインという言葉に込められています。社会変革とは、過去の延長線上にあるものではなく、これまでにない新しい世界観や価値観が突然、現れてくるものです。しかし、しっかりと俯瞰して世の中を見渡せば、その変化に気づくことができます。これまで、住宅は住宅、自動車は自動車とすみ分けされて未来が語られていましたが、住宅、人、社会を横断的に見ていくことで、もしかしたら移動しない暮らしが生まれてくるというアイデアも浮かんでいきます。すると、工場のあり方や通勤のあり方、鉄道・道路のあり方など、すべての捉え方が変わってきます。そうすると、車線を広げ、渋滞を緩和するという考え方など必要なくなってしまう。

と、地域の地場産業においてもデザイナーは技術革新を促すばかりではなく、その効果やプロセスをきちんと伝えることが求められます。そこで、プロダクトをトータルで生かした鉄道車両を作って走らせる取り組みを石川県ののと鉄道で行いました。当初、車両の外部にイラストを描いて走らせたかどうかという平凡な企画でした。それでは石川県全体のポトムアップにはなりません。そこで、県内のすべての地場産業の方々に説得して回り、車両の中に能登の伝統工芸品がちりばめられた「移動する文化空間」として新たな観光資源とを確立させました。

従来のものづくり思考の中でどっぷりつかってしまっていると、立ちいかなくなつた部分だけを見てしま

■やまむら しんいち プロフィール

略歴

三菱重工業(株)商品企画部入社。  
イタリアトリノ派遣・カロッツェリアにてデザインを学ぶ。  
三菱自動車工業チーフデザイナーとして、ギャランFTO、ランサー等の企画、デザインを手掛ける。  
1973年～  
デザイン事務所(株)コボを設立、代表取締役社長に就任。  
素材開発から流通までトータルな開発業務を目指し、素材や技術を商品化するまでのトータルデザインやブランド・マーケティング・プロジェクトにおいて活躍中。

役職

公益財団法人日本デザイン振興会理事 2013-2015  
Gマーク審査委員 1993-2012  
2005年愛・地球博「日本の匠」プロデューサー(経済産業省)  
アセアンGマーク審査委員  
日本デザインコンサルタント協会副代表理事  
日本デザイン事業協同組合理事  
愛知デザインユニオン理事  
金沢美術工芸大学非常勤講師  
第3回愛知県「人にやさしい街づくり」審査委員長  
あいちカーボンオフセット推進協議会副会長  
石川県エコデザイン審査委員長  
経産省中小企業支援ネットワークアドバイザー

著書

『デザインが企業を変える』(日刊工業社)  
『売れるデザイン売れないデザイン』(日本商工会議所)

生活者視点で導く未来の姿  
社会とデザインを結びつけるホロニック・デザイナー

がちです。そうではなく、全体を通して見ていくことで、本当の課題解決へと近づけると思っています。のと鉄道の事例では、ある特定の産業だけを伸ばしたのではなく、疲弊していた産業を再興させることができたのではないのでしょうか。

その他にも、九谷焼きと江戸硝子をコラボさせた「九谷和グラス」の開発を行いました。今ではそのグラスがバッキンガム宮殿の晩餐会の指定ワイングラスにされ、日本のテールウェアとして話題になっています。異素材を付けることで、産地と産地、人と人、産業と産業、地域と地域を結ぶことを可能にしました。地域内だけで、ものづくりをする例はあちこちにあります。しかし、それではなかなか社会に認められることはありません。同業者であるデザイナーや業界のメディアはどこか甘さがあります。社会のほうはもつとクールに、そのもの自体をきちんと見えています。

### 地方における可能性 変わるデザインシンキング

実は情報の集まる東京よりも地方のほうが、日本社会を客観的に見る  
ことができると思っ  
ています。イン

ターネットを駆使することで、どこにいても世界の情報を収集し、また地方から世界に発信することもできます。

バーチャルな情報が錯綜する中、ものづくりにまで落とし込んでいくには、事の本質に迫る必要があります。情報発信の原点であれば、石版刷りでしょう。当時の書籍には石版特有の素朴なイラストと端的に表現された文章がセットになって載っています。絵も稚拙で文章はシンプルですが、意図していることは十分に伝わってきます。つまり、そういったアナログな情報であっても、その中には膨大な情報が詰め込まれているのです。その感覚は実際に手に取って見てみないとわからないことです。その空気が伝えるものとは、ものづくり現場に居合わせていなければわからないことと同じ意味合いがあると思っ  
ています。

どこにいても世界の情報に触れることができる今、ものづくりの現場となる工房や研究所のある地方こそ、ものづくり拠点としてますます重要になってくるはず  
です。最先端の科学技術から伝統産業に至るまで、実際にかかわっていられることで、将来を見据えた暮らしの道具作りま

でもが見えてくるのです。

これまで50年以上にわたってデザイナーとして仕事をしてきましたが、これからの50年は、これまでの50年よりも、もっと変化の激しい時代を迎えるでしょう。50年前、扇風機に羽根がなくなるなんて誰も想像できませんでした。その発想は、専門的な技術情報ばかりに意識が向いていたから、思いつかなかったのです。例えば、自動車のボディが板金から樹脂にとつて変わられてきています。また電気自動車が普及すれば、マフラーは不要なものとなります。しかし、業界では未だに良いマフラーを作ることに奔走しています。すでにフォルクスワーゲンは1度の充電で300kmを走行できる大衆車を売り出しました。こうした変化を発端に日本の交通体系も変わってくるはず  
です。

技術を磨くことも大切ですが、ある特定の業界ばかりに固執せず、一度離れてみて、社会全体を見つめてみると、きっとこれからの50年が見えてくるはず  
です。それはますます面白い時代になっていることは間違いないと思っ  
ています。



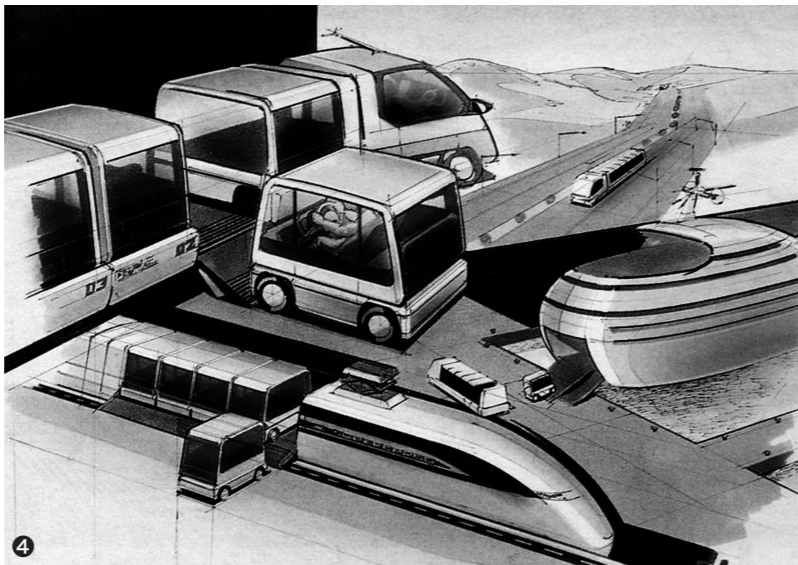
1



2



3



4

- 1自動車  
三菱自動車(株) 初代「ランサー」1973発売
- 2九谷和グラス  
九谷焼と江戸吹き硝子との連携による「九谷和グラス」2005～
- 3のと鉄道  
石川県のと鉄道(株) 「のと里山里海号」2015運行開始
- 4未来交通  
未来交通システム「アジアハイウェイ計画」2030予定